

東金文化会館開館20周年記念

深沢亮子トリオの調べ



2007 7.8 日 14:00開演
東金文化会館 大ホール

主催／東金文化会館開館20周年記念実行委員会

Program

プログラム

ヴァイオリンとピアノ

クライスラー／ベートーヴェンの主題によるロンディーノ
マスネ／タイスの瞑想曲

チェロとピアノ

ショパン／ラルゴ(チェロとピアノのためのソナタト短調 作品65 三楽章)
ポッパー／ガヴョット ニ長調 作品23
ドヴォルジャーク＝クライスラー／わが母の教え給ひし歌

—— 休憩 ——

ピアノ独奏

モーツァルト／ピアノ・ソナタ イ長調 K.331「トルコ行進曲付き」

- I. Andante grazioso
- II. Menuetto
- III. Alla Turca Allegretto

ピアノ三重奏

ドヴォルジャーク／ピアノ三重奏曲 第4番 ホ短調 作品90「ドゥムキー」

- I. Lento maestoso
- II. Poco Adagio
- III. Andante
- IV. Andante moderato
- V. Allegro
- VI. Lento maestoso

深沢亮子(P) 恵藤久美子(Vn) 勝田聰一(Vc)

クライスラー／ベートーヴェンの主題によるロンディーノ

ロンディーノとは、小規模なロンド形式による作品のことであるが、F.クライスラー(1875～1962)のこの「ベートーヴェンの主題によるロンディーノ」は、主要主題とそれをめぐる3つのエピソードを軸にして組み立てられている小品である。その愛らしい主題は、ベートーヴェンの「ロンドト長調WoO41」から流用されたものである。

マスネ／タイスの瞑想曲

J.マスネ(1842～1912)は、フランスのロマティック歌劇を代表する作曲家であるが、この「タイスの瞑想曲」は、1894年にパリで初演された彼の歌劇「タイス」の第2幕で演奏される間奏曲を原曲とする音楽である。ロマンティックで夢見るような旋律の美しさがきわ立っているこの小品は、歌劇を離れてヴァイオリンのための名ピースとして人気を定着させることになった。

ショパン／ラルゴ

1846年に完成をみたチェロ・ソナタ 短調作品65は、F.F.ショパン(1810～1849)の最後の大作であり、世話になったチェリストのヨーゼフ・フランシヨムに対する感謝の気持ちから作曲されたなどと考えられている作品である。このソナタでは、複雑な陰翳に富んだ渋く内省的な感情が深められているが、ラルゴのその第3楽章は、3部形式による短い緩徐楽章である。

ポッパー／ガヴオット ニ長調 作品23

D.ポッパー(1843～1913)は、プラハ生まれのチェリストであり、ヨーロッパ各国で演奏活動を繰り広げ、時代を代表するチェリストとして絶大な名声を博していた。彼は、チェロのための作品を多く作曲し、作曲家としてもチェロのレパートリーの拡大に貢献しているが、このガヴオットでは、ガヴオットのリズムによってチェロがプリリアントな名技を展開していく。

ドヴォルジャーク＝クライスラー編／わが母の教え給ひし歌

A.ドヴォルジャーク(1841～1904)は、1880年に歌曲集「ジプシーの歌」を作曲しているが、この「わが母が教え給ひし歌」は、ヘイドックというボヘミアの詩人の詩をテキストにしたその歌曲集の第4曲にあたるものである。ノスタルジックな旋律が美しいこの歌曲は、クライスラーのヴァイオリンのための編曲によって広く知られるようになった。

モーツァルト／ピアノ・ソナタ イ長調 K.331「トルコ行進曲付き」

W.A.モーツァルト(1756～1791)のピアノ・ソナタのなかでも最もポピュラーになっているこのK.331は、3つの楽章のなかにソナタ形式による楽章が1つも存在しないという珍しいソナタである。また、「トルコ風」と記されたこのソナタのフィナーレは、モーツァルトのトルコ行進曲として単独であまりにも有名になっている。このソナタは、K.330とK.332という他の2曲のピアノ・ソナタと一緒にまとめられ、1784年にウィーンで出版された。これらの3曲は、以前は1778年の夏にパリで作曲されたという見方が有力視されていたが、モーツァルトの自筆譜に基づく最近の研究では、その作曲年代には疑問がもたれており、1780年の夏から1783年の間に作曲されたという新説がクローズ・アップされてきている。アンダンテ・グラヴィオーンの第1楽章は、変奏曲形式による楽章であり、優雅な主題とその6つの変奏とコーダから構成されている。メヌエットの第2楽章は、3部形式による通常のスタイルのメヌエットである。アラ・トルカ・アレグレットの第3楽章は、ロンド形式によるフィナーレであり、オリエンタルなエキゾティズムに溢れている。

ドヴォルジャーク／ピアノ三重奏曲 第4番 ホ短調 作品90「ドゥムキー」

ドヴォルジャークは、全部で4曲のピアノ三重奏曲を残しているが、1891年2月12日に完成をみたこの第4番は、そのなかの最高傑作というだけでなく、彼の全室内楽曲のなかでも最高傑作の1つとしての位置を占めている名作である。ドゥムキーとは、ドゥムカの複数形であるが、ドゥムカとは、代表的なウクライナ民謡の1つであり、哀愁に充ちたゆるやかな部分と情熱的で急速な部分の対象を特徴とする様式である。そして、青年期からこのドゥムカを好んでいたドヴォルジャークは、自作のなかにこれをしばしば採り入れている。このピアノ三重奏曲は、全楽章がドゥムカの様式で書かれているが、第5楽章だけが急-緩-急という構成によっている他は、すべて緩-急-緩という構成によっている。楽章の区分に関しては、6楽章制とする見方が一般的になっているが、第1、第2楽章をまとめて一つの楽章とみなし、全体を5楽章制とする見方が一部に存在することも記しておく必要がある。レント・マエストーソ〜アレグロ・ヴィヴァーチェ・クワジ・ドッピオ・モヴィメントの第1楽章は、哀愁に充ちた調べと明るい調べの交錯によっている。ポーコ・アダージョ・ヴィヴァーチェ・ノン・トロツポの第2楽章は、ゆったりとした部分と民族舞曲風の部分から構成されている。アンダンテ〜ヴィヴァーチェ・ノン・トロツポの第3楽章は、A-B-Aという構造によっている。アンダンテ・モデラート・アレグレット・スケルツァンドの第4楽章は、一種の自由なロンド形式ともみることができるといえる楽章である。アレグロの第5楽章は、ドゥムカ的な性格の稀薄な楽章であり、変奏的な工夫を凝らした3部形式によっている。レント・マエストーソ〜ヴィヴァーチェの第6楽章は、典型的なドゥムカの様式に基づくフィナーレであるが、そこでは、かなり自由な処理が施されていることが特色になっている。

プロフィール



深沢亮子 (ピアノ)

千葉県東金市出身。3歳より両親からピアノの手ほどきを受け、10歳で永井進氏に師事。12歳で全日本学生音楽コンクール小学校の部で全国第1位、文部大臣賞を受賞。15歳で第22回日本音楽コンクールで首位受賞。日比谷公会堂にて上田仁指揮、東京交響楽団とウェーバーのコンチェルトシュテュックを協演。また、東京ヤマハホールにて国内デビューリサイタルを開催。

1956年、高校在学中、留学生試験に合格し、ウィーン国立音楽大学へ留学、G.ヒンターホーファー教授に師事。在学中ガスタイン賞を受賞し、1959年首席で卒業。翌年、ウィーン楽友協会ブラームス・ザールにおいてデビューリサイタルを開催し、大成功をおさめる。1961年、ジュネーブ国際音楽コンクール2位入賞(1位なし)。以来ムズィークフェライン黄金の間やコンツェルトハウスで度々オーケストラとの協演をはじめ、ヨーロッパ、南米、アジア諸国の主要ホールでのリサイタル、室内楽(新・旧ウィーン八重奏団、ウィーン室内アンサンブル、ブリュッセル弦楽四重奏団、シュトイデ弦楽四重奏団、ソリストではP.フルニエ(Vc)、I.ガヴリッシュ(Vc)、G.ピッヒラー(Vn)、徳永兼一郎(Vc)の諸氏他)のコンサート、放送にて活躍。日本の現代作品も海外へ積極的に紹介する。特に助川敏弥作品のピアノ曲を数多く初演、再演、録音している。

また、著名な指揮者(A.クヴァドゥリー、H.ヴァールベルク、L.マタチッチ、Z.コシュラー、E.メルツェンドルファー、B.クロブチャー、R.ヘーガー-O.マツフェラート、G.ヴァント、J.ローゼンシュトック、R.レッパード、K.エッティエー、K.エスタライヒャー、朝比奈隆、秋山和慶、森正、山田一雄、岩城宏之、小澤征爾、小林研一郎、外山雄三、渡邊暁雄 他)の元でスイス・ロマン管弦楽団を始めウィーン・NO.1トーンキユンストラ管弦楽団、ウィーン室内管弦楽団、グラーツ・フィルハーモニー管弦楽団、N響、東響、東フィル、日フィル、都響、読売日響、大阪フィル 他のソリストとして定期演奏会、特別演奏会、演奏旅行等精力的に活動し、ピアニストとしての国際的な地位を確立。

ウィーンでのベートーヴェン国際ピアノコンクール(1989、1993、2001年)、日本音楽コンクール、モーツァルト・コンクール 他の審査員を務めるかわら、NHKや民間放送局のラジオ、テレビへの出演(「名曲アルバム」、「ピアノのおけいこ」、「テレビリサイタル」、「世界の音楽」、「音楽の広場」、「題名のない音楽会」他)、数多くのレコードやCD、著作、楽譜の出版、全国各地での公開レッスンや公開講座、音楽祭での講師など後進の指導にもあたり、次代をにう若手ピアニストが育っている。

1992年には国際交流基金より音楽文化使節として天満教子女史(Vn)とルーマニア、チェコ、スロバキア、ブルガリアへ派遣され、10回の演奏会とラジオ、テレビ放送に出演し、大きな成果をあげる。1998年ケルン日本文化会館の招きにより同ホール及びウィーンにてコンサートを行う。

2003、2004年には、デビュー50周年記念演奏会を東京オペラシティ・コンサートホールで開催、佐倉市民音楽ホール、東金文化会館にも招かれる。また、記念のCDが2005年ナミレコードより発売された。

1963年大阪府民劇場奨励賞。1995年千葉県文化功労者。2005年東金市政特別功労者。

日本音楽舞踊会議代表理事。

深沢亮子ホームページ <http://www2.bbweb-arena.com/carillon/>



恵藤久美子 (ヴァイオリン)

3歳より母にピアノを、5歳より父にヴァイオリンの手ほどきを受ける。7歳の時、齋藤秀雄氏の薦めによりヴァイオリンの道を歩み始める。同時に桐朋学園「子供のための音楽教室」鎌倉分室へ入室する。ヴァイオリンを鷺見三郎、鷺見健彰、海野義雄の各氏に師事。室内楽を黒沼俊夫、齋藤秀雄両氏に師事。第41回日本音楽コンクール第2位入賞。

1972年に兄・堤剛と「二重奏の夕べ」を東京とカナダのオンタリオにて開催。1979年にリサイタルで弘中孝氏と共演。2002年に深沢亮子氏と「ヴァイオリンとピアノの夕べ」を、2003年、2004年、2005年12月に 深沢亮子、安田謙一郎両氏と「ピアノ、ヴァイオリン、チェロの夕べ」を、2004年、2006年6月に中野洋子(ピアノ)と「デュオコンサート」を開催。東京フィル、新日本フィルとメンデルスゾーンの協奏曲、札幌響とシベリウスの協奏曲、山形響とモーツァルトの協奏曲、桐朋学園オーケストラとブルッフの協奏曲を共演。その他アマチュアオーケストラとの共演も数多い。1975年より約10年間、桐五重奏団のセカンドヴァイオリンとして活躍する。また1980年より2年間山形交響楽団の客演コンサートマスターとして在籍する。

現在、弦楽合奏団「アンサンブル・アルス・ノヴァ」コンサートマスター。桐朋学園大学講師。



勝田聰一 (チェロ)

10才より鈴木水聰に師事。チェロを始める。1963年、日本音楽コンクールチェロ部門第2位。桐朋学園大学「音楽賞」を受賞して卒業。日本フィルハーモニー交響楽団に入団、第一チェロ奏者として活躍。1966年、日本フィルよりボストン交響楽団へ第一回の「交換楽員」として派遣される。アーサー・フィードラー指揮ボストン・ポップスで、ラロのチェロ協奏曲等を協演した。1968年、セントルイス交響楽団に入団。

1970年、帰国以後も、外来演奏家との協演、リサイタル等、また東南アジアからエジプト、ギリシャ、ヨーロッパ各地で巡回公演を行い、ウィーンのムズィーク・フェライン・ザールにおいて、クルト・ウェス指揮トーンキユンストラオーケストラとベートーヴェンの三重協奏曲の独奏者として演奏するなど国際舞台でも活躍する。弦楽合奏団「アンサンブル・アルス・ノヴァ」元代表責任者。

現在、桐朋学園大学、武蔵野音楽大学、東京音楽大学等で講師を務めている。